

おかげさまで開館36年目、「所蔵作品展 絵画をめぐる7つの迷宮」展の開催中に総入館者数500万人を越えました！
2012年度は、数年にわたる検討によって転換点を迎えた助成事業を中心に、当館の活動をご報告します。

美術家を支援する助成展を統合、公募形式のコンクールを創設

1 1976年6月に当館の運営のため設立された安田火災美術財団(現・損保ジャパン美術財団)は、第1回理事会で事業大綱として①「美術品の収集・保存・公開」、②「展覧会施設の運営・管理」、③「優秀な美術家の表彰」、④「新進美術家の育成援助(助成)」を決定しており、設立時から美術家(新進美術家)支援を活動の柱としています。そして、③「優秀な美術家の表彰」として「東郷青

児美術館大賞」を、④「新進美術家の育成援助」として「財団奨励賞」を設立し、この二つの受賞作家展を長期にわたり開催してきました。

2010年4月の公益財団法人への移行を機に、美術家支援についても「不特定かつ多数の者の利益の増進に寄与するもの」という視点で門戸を広げることし、従来の受賞作家展を発展解消させて公募による「損保ジャパン美術賞FACE」を創設、受



賞・入選作品展を開催することとなりました。さらに、今後「FACE」受賞作家のグループ展や、新進女性作家のグループ展等も併せて開催していきます。

展覧会名 | 損保ジャパン美術賞展 FACE 2013
会 期 | 2013年2月23日(土)～3月31日(日)
主 催 | 損保ジャパン東郷青児美術館、読売新聞社
協 賛 | 損保ジャパン

ファイナーレ選抜奨励展

2 2001年から12年間にわたり開催された『損保ジャパン美術財団選抜奨励展』のトップ賞「損保ジャパン美術賞」受賞作家12名の近作・新作を紹介するグループ展を開催しました。

当財団では、1977年から美術団体に「財団奨励賞」を授与し、1981年から受賞作品を一堂に集めた『奨励賞展』を開催してきました。2001年からは、無所属で活躍する作家が増えてきたことを鑑み、36美術団体「財団奨励賞」受賞作品に30名の推薦作品を併せた『選抜奨励展』となり、出品作品(平面部門最大66点)の中から「損保ジャパン美術賞」(1名)と「秀作賞」(3名)を授与してきました。

本展は、これまでの「損保ジャパン美術賞」受賞作家の活躍を紹介し、『安井賞展』終了後、新進作家が一堂に会する貴重な展覧会であった『選抜奨励展』の成

果を再確認し、新たな公募展『損保ジャパン美術賞展FACE』に新進作家支援活動の理念を継承するために開催されました。

展覧会名 | ファイナーレ選抜奨励展 一輝く12の視座—
会 期 | 2013年1月12日(土)～2月17日(日)
主 催 | 損保ジャパン東郷青児美術館、産経新聞社
協 賛 | 損保ジャパン



上段左から、開光市、矢元政行、福井路可、権藤信隆、後藤拓朗、岩岡航路、中谷晃、田中紘子、弓手研平、杉本克哉、鈴木愛弓、小野さおり(図版は作品の部分)

新しい公募展の第1回目となる「損保ジャパン美術賞 FACE 2013」には、1県を除く全都道府県から、13～96歳の“新進作家”1275名に応募いただきました。その中から長時間にわたる審査の結果、9名の受賞者が決定されました。出品作品の技法は、油彩、

アクリル、水彩、版画、写真、コラージュ、工芸、タピスリー、書など多岐にわたり、様々な領域の作家たちからの支持を受けたことが窺えます。

審査会では、想定以上の数となった全応募作品から、三次にわたる審査によって入選作品を絞り込み、さらに入選作品から



入選作の審査



受賞作の審査

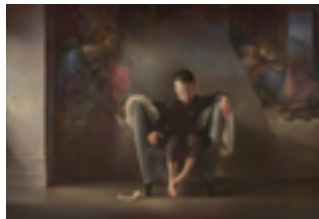
「損保ジャパン美術賞 FACE 2013」受賞作決定!



1



2



3



4

- 1) グランプリ 堤 康将《嘘く》(うそぶく)
- 2) 優秀賞 永原トミヒロ《UNTITLED 12-02》
- 3) 優秀賞 近藤オリガ《思いに耽る少年》
- 4) 優秀賞 田中千智《未知の森》

■その他の受賞一覧

読売新聞社賞…高木 彩《Bloom》
 審査員特別賞…渡辺泰史《SAMURAI INDUSTRIES—あんまり煙突が高いので》
 小山文雄《悪への行進》
 平川恒太《どこから来たか、どこへ行く》
 志世都りも《食事の時間》

受賞作を選出しました。入選作品の選別では、1点ずつ審査員席の前に作品を運び、まず挙手による審査で作品を選定し、それを一堂に並べ、審査員が作品の間を歩き回って見比べながら4回にわたり投票を行いました。また四次審査では傾斜配点制を採用し、グランプリと優秀賞3点を選定しました。その後、各審査員が審査員特別賞を4点及び読売新聞社からの審査員を加え読売新聞社賞を選出し、最終的な入選作品総数は69点になりました。

■審査員

本江邦夫 (多摩美術大学教授)
 松本 透 (東京国立近代美術館副館長)
 堀 元彰 (東京オペラシティアートギャラリー チーフ・キュレーター)
 林 寿美 (インデペンデント・キュレーター)
 原口秀夫 (損保ジャパン東郷青児美術館館長)

薔薇と光の画家ル・シダネル、日本初の回顧展を開催

アンリル・シダネル(1862～1939年)は19世紀末から20世紀前半にかけて活躍したフランスの画家です。月夜や日没の風景、街灯に照らされた町並み、室内、誰もいない食卓など、身近で親しみやすい主題をやわらかく明るい色彩で描き、さびしさと同時に人のぬくもりを感じさせる神秘的な印象が特徴です。キュビスムやフォーヴィスムなど、20世紀を代表する前衛的な絵画運動から離れた立場を取っていたため、美術史的な視点から大きく取り

上げられることが少なく、日本でも美術館のコレクション展や19世紀美術の展覧会の一部として紹介されることがほとんどでした。本展覧会は美術史家でル・シダネルの曾孫にあたるヤン・ファリノー・ル・シダネル氏の協力のもと、国内外の所蔵先から約70点におよぶ作品を集めた日本で初めての回顧展です。メルシャン軽井沢美術館、埼玉県立近代美術館、美術館「えき」KYOTO、当館、ひろしま美術館の全国5か所を巡回しました。



展覧会名 | 薔薇と光の画家 アンリル・シダネル展
 —フランス ジェルプロワの風—
 会 期 | 2012年4月14日(土)～7月1日(日)
 主 催 | 損保ジャパン東郷青児美術館、
 日本経済新聞社
 協 賛 | 損保ジャパン
 後 援 | フランス大使館
 協 力 | エールフランス航空
 企画協力 | プレゼントラスト

ジェームズ・アンソール展 グロテスクのルーツ

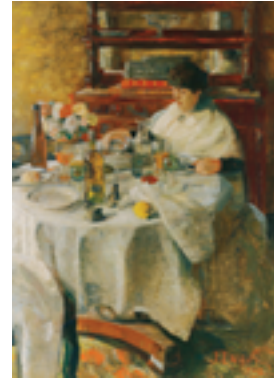
仮面や骸骨など、グロテスクな主題を使って人間の心の奥底を描いたベルギーの近代絵画を代表する画家、ジェームズ・アンソール(1860～1949年)。秋に開催された「ジェームズ・アンソール」展はアンソールの作品だけでなく、アンソールの周辺にいた同時代の画家たちの作品、あるいは影響を受けたと考えられるフランドルの画家たちの作品を展示し、アンソールの作品における「写実」と「幻想」の系譜をたどる展覧会です。アンソールが画家を目指した19世紀後半は、伝統的なアカデミズムに対抗するかのようになり、現実の世界に着目した「写実主義」が台頭しはじめた時代でした。ブリュッセルのアカデミーで伝統的な絵画教育を受けていたアンソールでしたが、時代の流れを敏感に感じ取り、自らも写実の道へ進んでいきまし

た。一方、ブリューゲルやルーベンスに代表されるフランドルの芸術家たちもアンソールの先達となり、彼らが描いた奇怪な生物、光と闇の世界は、やがてアンソールの幻想的な芸術へと結実していきました。本展覧会は世界で最も数多くのアンソール作品を所蔵する、アントワープ王立美術館の改修工事にともない実現したものです。豊田市美術館、愛媛県美術館、当館、岩手県立美術館、岡山県立美術館の全国5か所を巡回しました。

展覧会名 | アントワープ王立美術館所蔵
ジェームズ・アンソール—写実と幻想の系譜—
会 期 | 2012年9月8日(土)～11月11日(日)
主 催 | 損保ジャパン東郷青児美術館、NHK、
NHKプロモーション、東京新聞
協 賛 | 損保ジャパン
後 援 | ヘルギー王国大使館
協 力 | KLMオランダ航空



《首吊り死体を奪い合う骸骨たち》
1891年 油彩、キャンヴァス 59×74cm
アントワープ王立美術館
Photo: Lukas-Art in Flanders vzw/KMSKA



《牡蠣を食べる女(または色彩の国にて)》
1882年 油彩、キャンヴァス 207×150cm
アントワープ王立美術館
Photo: Lukas-Art in Flanders vzw/KMSKA



ちひろ美術館が所蔵する絵本原画約130点を展示した「ちひろと世界の絵本画家たち」展では、夏休みの親子連れの来館も視野に入れ、絵本という身近な素材によって美術に親しんでもらうことを意図しました。開催中「親子のためのワークショップ」と題し、展示内容に関連する2つのワークショップを1階ロビーで実施し

水彩の魅力と、時間のある絵に挑戦

ました(無料・自由参加)。

「ちひろの水彩技法を体験しよう!」は、ちひろが得意とした水彩のにじみ技法の魅力体験するものです。ちひろ美術館から招いた学芸員と、普段は当館の「対話による鑑賞会」で活動しているボランティアが講師をつとめました(実施7/22、参加212名)。

「4コマ絵日記を描こう!」は、日常のできごと等を4コマの絵で表すことで、時間を追って絵が展開していく絵本の創作を疑似体験するものです。より楽しめるように、描いた紙をサイコロ型に組み立てるキットを考案しました(実施7/28～8/19、参加613名)。

ワークショップのねらいは、制作を楽しむ等の体験を通じて、美術に親しみ、展示作品や作家への理解にも役立てることです。ギャラリーでのトークや講演会などと共に、当館の教育普及活動の一環として今後も継続していきます。

展覧会名 | ちひろ美術館コレクション
ちひろと世界の絵本画家たち
一心をつなぐアート
25か国の絵本原画が勢ぞろい—
会 期 | 2012年7月7日(土)～8月26日(日)
主 催 | 損保ジャパン東郷青児美術館、朝日新聞社、
ちひろ美術館
協 賛 | 損保ジャパン
企画協力 | アート・ベンチャー・オフィス ショウ

2012年度の鑑賞教育活動

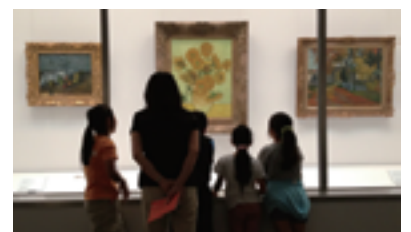
新宿区立全小中学校を対象とする「対話による鑑賞」の授業は本格的な実施から4年が経ち、本年度は小学校29校・中学校6校が参加しました。当館の展覧会を利用した『学習指導要領』に基づく「鑑賞」の授業は、見て感じたことを自分で確かめ、友人と話し合いながら、作品の見方や考え方を深める活動をガイドスタッフ(ボランティア・登録52名)

と行い、言語活動の充実、生きる力の育成、さらには豊かな人間性をはぐくむ事を目標としています。

ガイドスタッフ研修の充実化も図り、展覧会ごとの研修会(年6回)の他、勉強会4回、講師に上野行一氏(帝京科学大学教授)を招いての講習会、防災訓練等を開催し、館外の講演会にも参加しました。

一般の参加者を募る「対話による鑑賞会

『ギャラリー★で★トーク・アート!』も展覧会ごとに開き、休館日の展示室内で大人から子どもまでガイドスタッフと語り合いながら鑑賞を楽しみ、通常の来館時とは異なる「作品鑑賞」を体験してもらいました。





東山魁夷
《潮音》
1966(昭和41)年
紙本彩色
123.8×212cm
寄託

東山魁夷(1908~99年)は戦後の画壇を代表する日本画家の1人です。国内外を旅行し、写生に基づく心象風景としての風景画を確立しました。平明で清澄、豊かな叙情性と深い精神性を備えた画風は、今も幅広い支持を得ています。山陰の日本海がモチーフの本作は、皇居・新宮殿壁画制作のため日本各地の海岸に取材した頃に描かれました。東山作品としては比較的、写実的・動的な描写であり、自然の一角を切り取った構図と相まって、黒い岩礁に砕ける潮音が聞こえてきそうな臨場感を湛えています。

新収蔵品 紹介

左)高村光太郎
《水野実枝像》
1917(大正6)年
油彩、キャンヴァス
61.5×50cm
寄贈

右)高村光太郎
《水野勝典像》
1917(大正6)年
油彩、キャンヴァス
61.5×50cm
寄贈



明治の高名な木彫家高村光雲の長男である高村光太郎(1883~1956年)は、詩人、彫刻家として知られ、また自らが傾倒したロダンの評伝等で活発な文筆活動を展開しました。彫刻、絵画は寡作ながら、彫刻家を自認、伝統と対峙し日本近代彫刻史に名を残しました。2点の肖像画は、親友の詩人水野葉舟の両親を描いたもので、光太郎の貴重な油絵群の後期にあたります。当時、光太郎はアメリカでの個展の資金を得るため、彫刻の頒布会員を募り、葉舟とその父勝興は賛助会員に名を連ねていました。

損保ジャパン美術賞 FACE 2013 グランプリ 堤 康将 (Yasunobu Tsutsumi) 《嘯く》



1983年生まれ 福岡県在住
2005年 第36回九州産業大学卒展 買い上げ賞
2006年 九州産業大学大学院博士前期課程修了
2009年 第13回新生展 入選
2009年 個展(ギャラリー風・福岡)(2011年)
2010年 第45回日春展 入選(2011年)
2012年 アートアワードネクストII 入選



《嘯く》2012年
岩絵具・銀箔、麻紙 194.1×92.2cm

当館買上となるグランプリ受賞作品は、九州産業大学大学院を修了した日本画家の堤康将(29歳)の《嘯く》に決定。潜水服を着た男性がベットと共に水中を歩くシーンが新鮮で、審査員全員の支持を得ました。麻紙の上に銀箔を貼り、その上に岩絵具で着色されていますが、モチーフが奇抜で面白い。縦長の画面に電柱が2本、そして手前には色彩豊かな珊瑚らしき海底が描かれていま

す。電柱の上には鳥が止まっています、地上と海中の景色が混合されています。「日本画の定義はあいまい。どこからどこまでか、はっきりしない。いつのまにか、自分の描きたいように描くようになった」と語る堤は、小学生の頃に見た「空のものが水中を泳ぐ面白い」絵からヒントを得て、「水の中」をテーマに描いています。時にはアクリル絵具を取り入れたり、新しい絵画にチャレンジし、ジャンルを超えた絵画の行方を切り開く力を備えています。

REPORT

損保ジャパン東郷青児美術館レポート No. 40

発行日 | 2013年3月(年1回発行)
編集・発行 | 公益財団法人 損保ジャパン美術財団
デザイン | 若林純子
印刷 | 吉田印刷



ゴッホ《ひまわり》のある美術館

損保ジャパン東郷青児美術館

